俺はアラフォーの独身サラリーマンのオッサンだ。
ある日、会社の帰りに交通事故にあってしまい、
大けがを負って救急車で病院に運び込まれた。
直後に、命に関わるから緊急手術になると言われ、
手術室に運び込まれ、全身麻酔をかけられ…。
【俺】「ん…俺、一体どうなって…」
俺は目が覚めたのだが、そこは病室ではなく、事務所のような場所だった。
それにこの格好は、病人の着ている服にしては、妙にヒラヒラとしている。
髪も妙に長く伸びて、色素が抜けたのか金髪になっているし、
そもそも体つきがおかしくないか？　俺は恐る恐る部屋にある鏡を見た。

【俺】「なんだこの金髪の美少女は…って、これ鏡だから…コレ、俺かぁ！？　俺が美少女！？」
目を疑った俺は、試しに色々と体を動かした。
鏡に映る美少女は俺と寸分違わぬ動きをする。
【俺】「ど、どうなってんだ…」
【医師】「意識が戻ったようだね。どうだね美少女の体は」
俺が狼狽えていると、白衣を着た男性が入ってきた。
こいつが俺の主治医なのか？　とにかくこれがどういう状況なのか、
俺が男に説明を求めると、男はニコニコとした表情で説明をし始めた。

俺の元の体は損壊が激しく、このままでは死を免れなかった事と、俺が生き残るには、実験で作られたこの体に、脳を移し替える事しか無かった事を説明された。言われてみれば、病院に運ばれた際、朦朧とした意識で、何か書類にサインした気がする。
【俺】「話は分かったが…俺、この体でこの先どうすりゃいいんだ？」
【医師】「フヒッ…TS美少女のやる事なんて一つしかないだろう？」
俺がそうボソリと独白すると、医師はニチャアと気持ちの悪い笑みを浮かべた。これは悪い事を考えている顔だ。俺は背筋に寒気が走った。

【医師】「戸籍も失った君は、これからAV女優として生きるんだよ」
【俺】「え、AV女優！　できるかそんな事！」
いきなりな事を言い出した医師に、俺は大声で怒鳴った。自分でも可愛い声だと思った。
【医師】「…拒絶反応は知っているかな？
その肉体に移植された君の脳が、肉体から異物と認識され免疫から攻撃されるんだ。その苦しみは想像を絶するだろう。拒絶反応を抑える薬は高価なんだよ。意味はわかるね？」
戸籍も金も何もない俺に、選択する権利は残されていなかったようだ。

【俺】「く、くそっ…わかったよ…やればいいんだろやれば…」
【医師】「安心したまえ。その肉体は性行為用に作った特製品だ。性行為に対して苦痛を感じる事は無いし、快楽は倍増されているからね」
要するに今の俺の肉体は、男とのセックスに特化した体だから安心というわけだ。しかし、女の体とは言え、俺が男とセックスするなんて、正直気持ち悪い。そして、女の快楽は男の比では無いという話も聞いたことがある。こんな体で男とセックスなんてしたら、俺はどうなってしまうのか。俺は恐怖と不安が入り混じる中、医師の指示を待った。

【医師】「フヒッ…実はもう撮影の準備は出来ている。君のデビュー作ー発目は、TS少女が変態医師を足コキ逆レ処女喪失だ」
医師は服を脱ぎ、勃起したペニスを露出させた。
【俺】「うぐっ…この匂い…」
何日か風呂に入っていないのだろうか、医師のペニスからは強烈なチンカス臭が漂ってくる。不快なはずのその匂いなのだが、この肉体の性質なのか、俺は下腹部がキューンと疼くのを感じていた。

俺は医師の指示に従い、おそるおそるカメラへと近づく。
【医師】「ほら、まずは可愛らしい足裏を見せてくれたまえ」
【俺】「この変態め…」
そう言いつつ、俺はストッキングに包まれた足裏をカメラへと向けた。

直後に医師は、俺の足裏の匂いを思い切り吸い込んだ。
【医師】「美少女のタイツでムレた足裏の匂い、最高だ！」
【俺】「こ、こいつ…やめっ…」
足裏に吐息が当たるだけで、異様にくすぐったい。この体はかなり感度がいいようだ。

【医師】「さて、それでは踏んでもらおうか？」
【俺】「うぐっ…気持ち悪い…」
この体が小柄だからか、妙に巨大に見える
医師のペニスを、ぐりぐりと踏みつける。
その都度ペニスはビクンと反応し、俺の足裏にくすぐったさと、若干の気持ち良さを与えてきた。